

献辞

ここに、加藤正男先生の古稀を記念する論文集を献呈することができ、まことに喜びにたえませぬ。

先生は、すぐる大戦のさなか同志社に学ばれ、戦後の激動の時代を通じて学問への情熱を燃やされました。一九四九年には法学部の助手として大学に残られ、以後現在に至るまで実に半世紀近くにわたり研究、教育に専念してこられました。先生のご専門は民法であり、なかでも農地法を中心にした法社会学的なご研究の成果は、いまなお後進の大きな導きの糸となっております。

また、先生はご研究だけでなく誰よりも熱心に学生の指導にあたられました。しかも先生の教育方針は、一貫して「良心」の涵養を心がけられたものでありました。この間、先生の譬咳に接し、同志社で学ぶ喜びを知り、学園を巣立っていったものは数え切れません。先生の厳しくも暖かい教えは、学生だけでなく教職員すべての胸に、いまなお強く残っております。

この度、先生はご定年で学園を去られました。しかし、なお法律家として社会的に活躍中であります。先生の法律学へのご関心と、意欲的な実践活動とに、われわれはいまさらながら深い感動を覚えます。しかし、この度の古稀を一つの契機といたしまして、先生が今後ともますますご健勝でますますご活躍になられますよう、ここにあらためて

祈念いたしたいと思うのであります。

一九九八年三月

梅

津

法
学
部
長

實